

(第3種郵便物認可)

# 読書

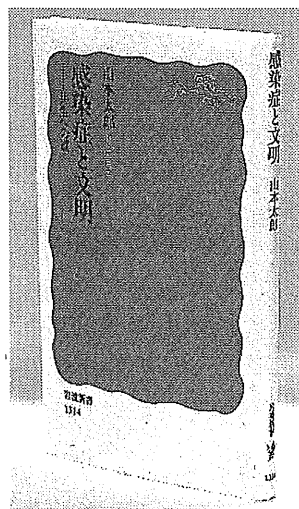
## 感染症と文明

(岩波新書・756円)

り組んでいる著者が示す答えは、感染症の「撲滅」ではなく、人類と感染症との「共生」である。一つの病原体を撲滅してしまうと、それに代わる新たな病原体が出現する。そのとき、まだ免疫を持たない人類はより深刻な被害を受ける。むしろ、既に免疫を獲得している病原体と共生していく方が、被害を抑える上で賢明だ。

著者は「病原体の根絶は、将来起こるであろう大きな悲劇の序章を準備するにすぎない」と指摘。「根絶は根本的な解決策とはなりえない。病原体との共生が必要だ」と強調する。もちろん、病原体との共生は「大きな悲劇」を避ける道ではない。むしろ、「小さな悲劇」を不可避とする。それは「私たち人類にとって決して心地よいものではない」だろう。それでも著者は「社会を破綻させる大きな悲劇を避けながら、小さな悲劇を最小にする、そのためにできることは何か、私たちは、それを歴史に学ぶ必要がある」と説く。人類が感染症などの自然と、どう折り合いながら生きていくべきかを考察した文明論の書でもある。

(高橋信雄・本社特別論説委員)



山本 太郎著

## ■「共生」こそが予防策

### 注目の冊

その答えを探るために、感染症の歴史を振り返りつつ、感染症予防の根本対策を示唆したのが本書だ。長崎大熱帯医学研究所教授で、世界を駆け巡って感染症対策に取

はしか、ペスト、天然痘など、いかに恐ろしい感染症が猛威を振るっていても、ピークを過ぎれば、次第に感染者が減り始め、いつかは終息する。これは、いったん感染したことで免疫を持つようになった人が増えていくためだ。免疫を持つ人が集団の中で一定の割合を超えると、病原体は人間に感染しながら増殖することができなくなる。感染症から人間を守ってくれる最大の武器は、自然に授けられた免疫の力である。

悲劇が拡大するのは、免疫を全く持たない集団を感染症が襲ったときだ。文明発祥と同時に人間に取り付いたはしかが、今では世界中ほとんどの成人が免疫を持つようになって恐れる必要がなくなったように、免疫の力を生かしながら人類が感染症に適応していく道はないものか。